

2022年11月6日 午前礼拝  
「みこころを成就されたイエス様」 説教者:堺希望伝道師

【引用聖句】

マタイ 2:13~18

13. 彼らが帰って行ったとき、見よ、主の使いが夢でヨセフに現れて言った。「立って、幼子とその母を連れ、エジプトへ逃げなさい。そして、私が知らせるまで、そこにいなさい。ヘロデがこの幼子を捜し出して殺そうとしています。」
14. そこで、ヨセフは立って、夜のうちに幼子とその母を連れてエジプトに立ちのき、
15. ヘロデが死ぬまでそこにいた。これは、主が預言者を通して、「わたしがエジプトから、わたしの子を呼び出した」と言われた事が成就するためであった。
16. その後、ヘロデは、博士たちにだまされたことがわかると、非常におこって、人をやって、ベツレヘムとその近辺の二歳以下の男の子をひとり残らず殺させた。その年齢は博士たちから突き止めておいた時間から割り出したのである。
17. そのとき、預言者エレミヤを通して言われた事が成就した。
18. 「ラマで声がする。泣き、そして嘆き叫ぶ声。ラケルがその子らのために泣いている。ラケルは慰められることを拒んだ。子らがもういないからだ。」

【説教要約】

マタイの福音書の特徴として、旧約聖書のみことばが「成就した」という表現が多く出てくることがあります。今日の箇所でも2か所「成就」ということばが出てきます。日本語で「成就」を複数の辞書で引いたところ、「願いが叶う事」や「計画が達成されること」という意味で使われます。

確かに、大昔から言われていた神様のご計画が、イエス様によって実現したのです。ただし、それは未来予知のような「予言的中」という意味とは少し異なります。厳密には、「満たされる」という意味が聖書の成就には含まれています。旧約聖書の時代から少しずつ形になっていたみことばを、本当に完成させたのがイエス様だということです。

今日出てくる2つの「成就」には共通点があります。それは、「輝かしい出来事が実現した」というよりも、「苦しみやみじめさを感じさせるような出来事が実現した」という点です。そこに、神様のメッセージがあります。

①新しい出エジプト

マタイ 2:13, 彼らが帰って行ったとき、見よ、主の使いが夢でヨセフに現れて言った。「立って、幼子とその母を連れ、エジプトへ逃げなさい。そして、私が知らせるまで、そこにいなさい。ヘロデがこの幼子を捜し出して殺そうとしています。」

マタイ 2:14, そこで、ヨセフは立って、夜のうちに幼子とその母を連れてエジプトに立ちのき、

マタイ 2:15, ヘロデが死ぬまでそこにいた。これは、主が預言者を通して、「わたしはエジプトから、わたしの子を呼び出した」と言われた事が成就するためであった。

先回は、東方の博士たちがやって来て、イエス様を礼拝した箇所を見ました。その際、エルサレムを治めるヘロデ大王はイエス様に嫉妬し、イエス様を殺そうとたくらんでいたのです。

そのことを、御使いがイエス様の父であるヨセフに教えてくれます。ヘロデがイエス様を殺そうとしているので、国外のエジプトへ逃げなさいと。

エジプトは、この当時安全で比較的暮らしやすい場所でした。人間的に見れば、危険から避難するだけの出来事に見えるのです。

しかし、ここには一つのメッセージがありました。

マタイ 2 : 15b, これは、主が預言者を通して、「わたしはエジプトから、わたしの子を呼び出した」と言われた事が成就するためであった。

この国外への避難こそ、実は旧約聖書の預言が成就した瞬間だったのです。

ホセア 11 : 1, イスラエルが幼いころ、わたしは彼を愛し、わたしの子をエジプトから呼び出した。

これはイエス様がお生まれになる 700 年以上前に、ホセアという預言者を通して語られたみことばです。

ただし、これは単に「イエス様はエジプトから帰って来る」という意味に留まりません。

ホセア書の続きを見ると分かります。

ホセア 11 : 1, イスラエルが幼いころ、わたしは彼を愛し、わたしの子をエジプトから呼び出した。

ホセア 11 : 2, それなのに、彼らと呼ばば呼ぶほど、彼らはいよいよ遠ざかり、バアルたちにいけにえをささげ、刻んだ像に香をたいた。

ホセア 11 : 3, それでも、わたしはエフライムに歩くことを教え、彼らを腕に抱いた。しかし、彼らはわたしがいやしたのを知らなかった。

実は、これは神様が出エジプトの時のイスラエルを思い出して語っておられる箇所なのです。

実際に出エジプト記を読めばお分かりになることですが、神様はイスラエルという民族を特別に愛されました。

それで、当時エジプトの奴隷になっていたイスラエルを、十の奇跡を起こされて救い出されたのです。

しかし、イスラエルは自分たちを救い出してくださった神様に反抗し続けました。旧約聖書はまさにイスラエルの不信仰の歴史を記したものです。イスラエルはまことの神様から離れ続け、偶像の神に頼るようになり、最後には不信仰の為に国が滅んでいきます。

しかし、旧約聖書がイスラエル、ひいては人間の不信仰の歴史であると同時に、旧約聖書は絶える事のない神様の愛の歴史でもあります。

ホセア書の 11 章を読み進めると、神様のみこころがありありと書かれています。

ホセア 11 : 8, エフライムよ。わたしはどうしてあなたを引き渡すことができようか。イスラエルよ。どうしてあなたを見捨てることができようか。どうしてわたしはあなたをアデマのように引き渡すことができようか。どうしてあなたをツエボイムのようにすることができようか。わたしの心はわたしのうちで沸き返り、わたしはあわれみで胸が熱くなっている。ホセア 11 : 9, わたしは燃える怒りで罰しない。わたしは再びエフライムを滅ぼさない。わたしは神であって、人ではなく、あなたがたのうちにいる聖なる者であるからだ。わたしは怒りをもっては来ない。

神様はイスラエルを救いたかったのです。しかし彼らの不信仰のゆえに出エジプトから始まった出来事は、国の滅亡という悲劇で終わるのです。人には、自分で滅びから救われる力はないのです。むしろ、聖い神様に罪を犯し続け、愛することや従うことに失敗し続けることしかできません。

パウロは、自分の中に良い部分があるかどうか、このように言っています。

ローマ 7 : 15, 私には、自分のしていることがわかりません。私は自分がしたいと思うことをしているのではなく、自分が憎むことを行っているからです。

ローマ 7 : 16, もし自分のしたくないことをしているとすれば、律法は良いものであることを認めているわけです。

ローマ 7 : 17, ですから、それを行っているのは、もはや私ではなく、私のうちに住みついている罪なのです。

ローマ 7 : 18, 私は、私のうち、すなわち、私の肉のうちに善が住んでいないのを知っています。私には善をしたいという願いがいつもあるのに、それを実行することがないからです。

神様のみこころ（律法）を分かっていたとしても、それを行う善が自分の中にはないとパウロは語るのです。あのパウロが、です。

パウロは、自分の力で神に従おうとしていた時の努力をこのように振り返っています。

ピリピ 3 : 6, その熱心は教会を迫害したほどで、律法による義についてならば非難されるところのない者です。

ピリピ 3 : 7, しかし、私にとって得であったこのようなものをみな、私はキリストのゆえに、損と思うようになりました。

パウロのしてきた努力、熱心さ、積み上げて来たもの、それらは神様の前では「損」であったと言うのです。

これこそ、人がキリストにつまづく点です。神は、人が持っているあらゆる価値のあるもの

を、永遠のいのちの前では無価値とされます。他の何を持っていたとしても、永遠のいのちと交換できるものなどないのです。

そして、永遠のいのちを持たないならば、永遠の滅びが死後に待っています。

このためにこそ、キリストは来られたのです。

マタイの福音書に戻りまして、イエス様を通して、ホセア書のみことばが成就した＝満たされたということを見ました。

それはどういうことかと言えば、イスラエルは神様の大きな奇跡によってエジプトから助け出されても、神様に反抗し背くことしかできませんでした。彼らは私たち含め、すべての人間の代表です。

神に従うことができない。これが人間なのです。

しかしイエス様は、ヘロデの迫害からの避難を通して、もう一度出エジプトをやり直してくださいということなのです。新しい出エジプトが、イエス様によって成されたということなのです。

すなわち、イスラエルは出エジプトの後不信仰によって失敗しましたが、イエス様は人間には進むことのできない信仰による成功の道を進まれるということなのです。

なぜなら、イエス様は単なる人ではなく、神御自身が人間として来られたお方だからです。この、神御自身が、滅びの道を行くしかない人間を救うために来てくださったこと。ここにホセア書の預言が、神様のみこころが成就したのです。

もし人が自分の力で進むなら、イスラエルと同じ不信仰と失敗の結果に終わります。

しかし、もしイエス様を自分を罪と滅びから救いに来られた救い主だと信じるなら、その人はイエス様の行かれた道を進みます。

パウロは、自分ではなくイエス様を信じるようになった後の、新しい誇りについてこう言います。

ガラテヤ 6：14, しかし私には、私たちの主イエス・キリストの十字架以外に誇りとするものが決してあってはなりません。

神様の面前に立って唯一価値があるのは、自分の持っている何かではなくて、自分のために死んでよみがえってくださったイエス・キリストを信じていることだけなのです。

## ②ともにおられる神

マタイ 2：16, その後、ヘロデは、博士たちにだまされたことがわかると、非常におこって、人をやって、ベツレヘムとその近辺の二歳以下の男の子をひとり残らず殺させた。その年齢は博士たちから突き止めておいた時間から割り出したのである。

マタイ 2：17, そのとき、預言者エレミヤを通して言われた事が成就した。

マタイ 2 : 18, 「ラマで声がする。泣き、そして嘆き叫ぶ声。ラケルがその子らのために泣いている。ラケルは慰められることを拒んだ。子らがもういないからだ。」

イエス様家族がエジプトに逃げると、続けて事件が起こります。

ヘロデは、東方の博士たちがイエス様の星を見てイエス様を求めてやってきたときに、博士たちを偵察のために送り出しました。「私も行って拝むから」と嘘をついて。その腹の底では、約束の王イエス様が来られたことに怯えて、イエス様を殺してしまおうとしていたのです。

博士たちは御使いから「ヘロデのところには帰るな」と言われていたので、ヘロデと会わずに国へ帰って行きました。

それでヘロデは、事前に博士たちから聞き出しておいた星の出て来た時期に基づいて、ベツレヘム一帯の 2 歳以下の男児を皆殺しにする計画を実行します。

初めから、もし博士たちが帰って来なかったらそうしようと思っていたのでしよう。

あまりに残虐です。どうしてこんなことが出来るか、今の自分には分かりません。しかし、このヘロデの姿も、全ての人の罪を反映しています。

このヘロデの虐殺も、預言が成就した出来事と書かれています。これはエレミヤ書の 31 章からの引用です。

エレミヤ 31 : 15, 主はこう仰せられる。「聞け。ラマで聞こえる。苦しみの嘆きと泣き声が。ラケルがその子らのために泣いている。慰められることを拒んで。子らがいなくなったので、その子らのために泣いている。」

ラケルについて話すと大変長くなってしまっているので今回は省略します。

このエレミヤ書のみことばは、イエス様がお生まれになる 600 年ほど前に書かれたものです。

先ほどのホセア書と同様に、イスラエルが不信仰によって滅びる様を嘆く様子です。ラケルは、12 あるイスラエル民族の内 3 つ（マナセ、エフライム、ベニヤミン）の先祖です。そのラケルが、自分の子どもたちが不信仰によって滅び、奴隷とされていく様子を見て泣いている言葉です。それは母親のラケルの立場で書かれていますが、神様の御思いです。

神様にとって、エレミヤ書でのイスラエルの滅亡も、マタイでのヘロデの虐殺も、自分の子が殺されていく気持ちだったのです。

しかし、これはただ悲劇が起こったという預言ではありません。エレミヤ書の続きを読み進めると、

エレミヤ 31 : 15, 主はこう仰せられる。「聞け。ラマで聞こえる。苦しみの嘆きと泣き声が。ラケルがその子らのために泣いている。慰められることを拒んで。子らがいなくなったので、その子らのために泣いている。」

エレミヤ 31 : 16, 主はこう仰せられる。「あなたの泣く声をとどめ、目の涙をとどめよ。あなたの労苦には報いがあるからだ。——主の御告げ——彼らは敵の国から帰って来る。

エレミヤ 31 : 17a, あなたの将来には望みがある。——主の御告げ——

悲劇の後に、慰めが与えられる預言なのです。「あなたの将来には望みがある」のです。それはイエス様によって与えられます。子を失う神様の御思いがエレミヤ書の続きに記されています。

エレミヤ 31 : 20, エフライムは、わたしの大事な子なのだろうか。それとも、喜びの子なのだろうか。わたしは彼のことを語るたびに、いつも必ず彼のことを思い出す。それゆえ、わたしのはらわたは彼のためにわななき、わたしは彼をあわれまずにはいられない。——主の御告げ——

不信仰なイスラエルをはじめ、誰にも滅びて欲しくないが誰よりも願っておられるのは神様です。

しかし人は、誰もかれも罪人なので自分から滅びに向かっているのです。

この世に救いがないことを記したみことばがあります。

イザヤ 8 : 21, 彼は、迫害され、飢えて、国を歩き回り、飢えて、怒りに身をゆだねる。上を仰いでは自分の王と神をのろう。

イザヤ 8 : 22, 地を見ると、見よ、苦難とやみ、苦悩の暗やみ、暗黒、追放された者。

悲しみや痛みは罪から来ます。神のいない世界に住むなら、人はいずれここに描かれている人ようになるのではありませんか。日常では他人がいるので平静を皆装いますが、恐れや痛み、怒りのない人はいるのでしょうか。

罪から痛みが、痛みが他人の痛みを引き起こし、終わりはありません。肉体的にも、霊的にも神様から離れた死の世界だからです。最後に行きつくのは死です。

しかし、その罪の世界から私たちを救い出すために、イエス様は来られたのです。イザヤ書の続きはこうです。

イザヤ 9 : 1, しかし、苦しみのあった所に、やみがなくなる。先にはゼブルンの地とナフタリの地は、はずかしめを受けたが、後には海沿いの道、ヨルダン川のかなた、異邦人のガリラヤは光栄を受けた。

イザヤ 9 : 2, やみの中を歩んでいた民は、大きな光を見た。死の陰の地に住んでいた者たちの上に光が照った。

私たちに本当の慰めを下さるためにイエス様は来られたのです。神様は、遠くから心配するのではなく、実際に来られ、人と同じ立場で私たちのすべての痛みをご経験して下さったのです。私たちの痛みも、悲しみも、自分のことのように理解できる神です。

神様がお語りになった御思いや救いが、イエス様によって現実になりました。イエス様は遠くにおられる神ではなく、全く同じ人間になって生きられた心の理解者です。

ヘブル4：15, 私たちの大祭司は、私たちの弱さに同情できない方ではありません。罪は犯されませんでした。すべての点で、私たちと同じように、試みに会われたのです。ヘブル4：16, ですから、私たちは、あわれみを受け、また恵みをいただいて、おりにかなった助けを受けるために、大胆に恵みの御座に近づこうではありませんか。